



づの
鍵

獅子文六



づの
獅子鍵
文子
六



中央
公論
社

べつの鍵

著 者 獅 子 文 六

昭和 36 年 6 月 30 日 印刷

昭和 36 年 7 月 8 日 発行

発行者 栗 本 和 夫

印 刷 精 興 社

発行所 中 央 公 論 社

東京都中央区京橋 2 / 1

電話 (561) 5921~9番

振替・東京34番

定価 290 円

© 検印廃止

目次

べつの鍵

三

おちんちん

元

二階の女

五

ケツネ滅びたり

二三

何か寂しい男

二七

狐よりも賢し

二五

べつ
の
鍵

一

初夏の晴れた日曜の夕だった。

角川医師は、一人前の釣魚家らしく、薄汚れた防水ジャンパーや、膝上まであるゴム長靴で装った身を、わが家の内玄関へ、現した。

「おい、帰ったよ」

彼は、ひどく、機嫌がよかった。

「お早かったわね。どうでした？」

細君の里子さんと、看護婦の今村さんが、迎えて出た。二人とも、白い姿だった。今村さんはいつも白衣だが、細君も、お勝手仕事の最中で、白い割烹着。

「大漁だよ、きまつてるさ」

角川医師は、クリクリした円顔の中心から、赤い舌を出した。

「先生、ビクを拝見しますよ」

今村さんが、手を出しかけた。

「こら、余計なことをするな」

しかし、奥さんと二人がゝりで、ビクが開けられた。

「あら、ハヤが、たった七疋！」

「とても可愛らしい、幼稚園のハヤばかり……」

二人が、声を立てゝ笑うと、角川医師は、ムツとして、

「漁果は、問題ではない。釣りを愉しむのが、目的なのだ。つまらん世話をやくな」と、荒い声を出した。

しかし、怒りながら、彼は、自分を疑った。

（おや、どうして、こんなことに、腹を立てたのだろう。これくらいの冗談は、いつも、一緒に笑っているのに……）

同時に、細君と看護婦も、顔を見合せて、同じことを考えた。

（あら、こんなことに怒る先生じゃないのに……。ご機嫌が悪いと思ったら、逆に、何か、ムシクシクしたことが、あったんだわ）

しかし、どっちにしても、大したことではなかった。その証拠に、

「おい、風呂は沸いてるか」

と、訊いた時の角川医師は、平常^{ふだん}の調子に戻っていた。

「えい、すぐ、お入りになれますわ」

彼は、廊下のつきあたりの浴室へ、歩みを早めた。

肥満型体質の男の常で、彼は入浴が好きだった。それなのに、彼が、心から入浴を愉しむことのできるのは、一週一回しかない。つまり、日曜の入浴なのである。夕食前にゆっくり風呂につかりたくても、平日は、往診でおくれることもあり、うまく夕食前に入浴できたとしても、夜間に、いつ急患の知らせがないとも限らないから、落ちついて、入浴を愉しむわけにいかなかった。

しかし、今日は、大丈夫である。風呂に限らず、今日のように晴天ならば、好きな釣りに出かけられるし、雨なら、釣りに次いで好物の麻雀^{トランプ}を愉しめるし、彼のような開業医にとって、日曜ほど、うれしいものはなかった。日曜だって、人間が病気にかゝらないわけではないのに、休診ときまれば、電話もかゝらなければ、人も来ない。まるで、病人がないみたいである。そこで、一週一度の休息ができる――

彼は、日曜の度毎に、幸福感を味うのだが、今日は、特別の気持だった。

（ああ、いい気持だ。適度の疲労と、適度の空腹——そして、湯から上れば、冷たいビールと、日曜日のご馳走が待ってる。おれは、幸福だ）

彼は、タイルのふちに、坊主刈りの頭をのせながら、満足感をかみしめた。尤も、いくら風呂加減がよくなったって、一週一度の安息日だって、人間は、そう易く幸福の感情を、味えるものではない。やはり、角川医師が、人生の大半を、多くの心残りなく、歩き続けてきたからだろう。細君の里子さんとは、見合い結婚ではあったが、夫婦仲もシツクリしているし、長男は大学を出て、名古屋の重工業会社へ就職したし、長女も、この春、結婚して、渋谷のアパート住いをしているが、月に二、三度は、遊びにくるし、心置きなく、老後を愉しめる境遇だった。

それに、彼がこの土地に開業してから、二十数年も経ち、態度はガラガラしていても、誠実な内科小児科の医師として、評判もいゝので、多忙な毎日を送ってる代りに、家の増築をしたり、小型自動車を買入れたりしても、生活の余裕があった。若い時には、少しは道楽もやって、細君に苦勞をかけたが、この頃は、釣魚と麻雀以外に、興味がなく、金銭欲も少なくなっているから、当年五十二歳とも思えない、好々爺の面貌になっていた。

その薄禿げの坊主頭を、彼は、気持よさそうに、何度も、ザブザブと、湯をかけた。頭を洗

い流す快感のために、彼は、坊主刈りにしてゐるやうなものだった。尤も、この面相のために、患者から親しまれる一得もあった。

(待てよ……)

彼は、浴槽から出ようとして、ふと、思いがけないことを、考えた。

(この気分なら、今夜は、里子にご不沙汰見舞いが、できるのではないかな)

中年を過ぎた良人の悩みを、医師である彼も、持っていた。つまり、夫婦関係に対する、興味の減退である。興味というより、実行力の衰えである。彼も、まだ、そんな年齢ではないし、体も健康を誇れるのだが、数年前から、隣りの寢床に臥おている細君を、あまり、顧慮しなかった。勿論、不能に墜入おちいったわけではなく、月に一回ぐらいの交渉は持つてゐるのだが、どうも、それが義務的になり、事後の満足も、若い頃のように爽やかでない。何か、疲れが残る。不潔感さえ味うことがある。そして、次第に、そのことが、面倒に感じられてくる傾きがある。

そんな、バカなことではない。今から、そんなことではいけない。第一、四十七歳になつても、まだ更年期現象を現さない細君に対して、気の毒でもある。

彼は、決して、細君を愛さない良人ではなかった。彼女は美人ではなくても、従順であり、頭も悪くなかった。また、肉体的にも、彼を嫌悪させるものを、持つてはいなかった。無論、

どんな夫婦でも経験する倦怠期というものがあり、その頃には、理由なしに、細君の性格、容貌、肉体のすべてが、鼻について堪らなかったが、それは、もう遠い昔である。今では、一時も側を離れられては困る細君であり、性的対象としても、彼女以外との交渉は、あまり気が進まなかった。

その上に、彼が彼女と結婚したのは、忘れられない生涯の転機を、伴っていた。

彼がG大の医科を出た時には、医学者として名を成したい野心に、燃えていた。医学に良心と情熱をさへげて、一生を送るつもりだった。私大ではあるが、G大には、優れた教授が集っていたが、彼の師事したT先生は、彼を可愛がってくれ、彼がG大病院内科に、助手勤めをしている頃に、将来、愛嬢を彼と結婚させることを、匂わせてくれたほどだった。

しかし、突然、彼の父が死んでから、情勢がまったく変ってしまった。彼の家は貧しく、父親はムリをして、息子を大学に入れてくれたのである。死後は、彼の母や、弟妹の生活と教育の責任も、彼の肩にかゝって来ないわけにかなかった。そして、病院勤務で、彼が手にする報酬といったら、誰も信ずる者がなくらい、少額だった。彼自身の生活費にすら、遠く足りなかった。

彼は、煩悶の夜を重ねた末、遂に、医学者となる夢を、捨てる決心をした。平凡な街の開業

医となつて、母や弟妹の生活費を稼ぐ氣になった。その時の辛さは、今でも、彼は想い起すことができた。医学の研究を捨てる苦しみに、恩師の令嬢を諦めねばならぬ悲しみが、重なったからだった。恩師は、自分の後継者として、彼を考えていたのであつて、街医者となる彼に、何の希望も托せないのは、当然だった。

その頃に、郷里の母から、嫁の候補者として、薦めてきたのが、今の妻の里子だった。彼女は、父の友人の娘で、女学校を出てから、家事の手伝いをしていた。

彼は、里子の写真を見ただけで、本人に会いもしないで、結婚する氣になった。里子の写真に、一目惚れしたというわけではなかった。反対に、どこにも特徴のない、平凡な田舎娘と、思っていた。しかし、彼は、どんな娘でもいゝから、すぐに結婚して、恩師の令嬢に対する未練を、忘れたかったのである。

（決心を狂わせないためにも、その結婚が必要なんだ！）

そして、彼は、里子を妻とした。生涯の針路を変えた記念というよりも、それによつて、まったく心機を一転する信号としたかったのだ。

尤も、彼はすぐ開業する金もなかったので、保険会社や製薬会社へ入つて、月給生活をした時代があつた。その頃が、一番苦しかった。郷里へ送金の金を浮すために、極度に生活を切り

つめなければならなかった。しかし、里子は、いつも明るい顔で、それに耐えた。その感謝が、良人としての愛情に、交ってきた。

戦前に、彼は、東京の玉川線のある町に、やっと、自分の医院を開業することができた。夜半の往診も、イヤな顔をせず、自転車に跨がって馳せつけるような努力が、次第に酬われて、患家の数も殖えた。長男と長女が、相次いで生れた。郷里の弟妹も、皆身を固めて、彼が世話する必要がなかった。もし、戦災にも遭わず、彼が軍医として応召することもなかったら、彼は、もっと早く、今日の安楽な身分となっていたらう。

戦後の資材不足で、もとの場所に、前より小さい医院を建て、発足したが、しかし、瞬間に、増築や改築を加えて、今のような堂々たる構えにできたほど、彼の商売は繁昌した。開業医として、小成功者の一人に算えられるところまできた。その間にも、里子は、常によりき協力者であり、彼も糟糠の妻としての尊重と愛情を、次第に深めてきた。

もう、彼は、恩師の令嬢が、どんな顔をしていたか、忘れてしまった。恩師も、G大医科の名誉教授となつて、現職を退いているが、年始に邸宅を訪ねても、令嬢のことなど訊く興味もなかった。イヤイヤ始めた開業医ではあつても、二十数年の努力と、成功の自負心とで、彼は自分の現在に、すっかり満足していた。むしろ、医学者として名を揚げようとしたのは、青年

の虚栄心に過ぎなかったと、自認するほどになっていた。ガンを地上から根絶する研究は、もとより尊敬すべきだが、風邪や胃腸病の手当てをして、軽いうちに治療する平凡な医術を、軽蔑する理由が、どこにあるうか。

(それに、わたしが、果して、学者に向いた人間か、どうかも、疑わしいのだ。街医者に転向したのは、モッケの幸いだったかも、知れないのだ。とにかく、わたしは、現状に満足している。これが、人間の幸福というものではないか。少しぐらい、あの方の力が弱ったといつて、文句をいうことはない。原因は、よくわかつているのだから……)

彼は、自分の性的衰弱を考えても、べつに、悲観する気にならなかった。もし、彼が、明日から、医院を閉じて、好きな釣魚と麻雀に日を送るとしたら、青春の情熱は取り戻せないまでも、五十二歳の男子の能力は、必ず、実現して見せる自信があった。貝原益軒の『養生訓』の年齢別標準回数などより、上廻っても、余裕シャクシャクというところも、見せられるだろう。すべては、商売繁昌が原因なのである。午前 of 来院患者は多いし、午後は往診で潰れるし、夜間も、度々叩き起されるとなると、体の休まる暇はなかった。四十代までは、まだ平気だったが、五十の声を聞いてから、急に、過労が身に応えてきた。そして、心臓や消化器に、影響を及ぼさなかった代りに、明かな、性的神経衰弱の兆候を、示してきたのである。これは、良

人としても、まだ働き盛りの男子としても、名誉なことではないから、彼も、お手盛りの注射や服薬を、ずいぶん試みてみたが、思わしい効験もなく、医者のかせに、金鈴法などという民間療法にまで、手を出したりした。現に、風呂桶から出たら、今日も、それを試みるつもりなのである。

幸福な角川医師の唯一の悩みといえ、そのことなのだが、しかし、少くとも今日は、それすら、彼を脅かさなかった。

（一日、思う存分、休養したせい、か、どうやら、体の調子がいい。この前から、一ヵ月以上たっているのだから、乏しいながらも、蓄積ができたのだろう。久振りで、里子にも、申訳が立つかな）

亭主というものも、外面は、威張っていても、こういう問題には、案外、小心で、責任感の衰れた虜となるらしい。そして、やっと、その勤めを果した時には、税務署へ完納した善良な国民のように、ホッとした喜びを、全身に味うものらしい。

彼は、大きな水音を立て、勇ましく、風呂桶から、飛び出した。